



特233
958

伊波範雄著

ひとのもち

始



特233
958



の
母



自序

「人の母」を題して講演したのは、今は十八
年の昔、明治四十四年十月二十九日、岡山縣
小田郡矢掛町高等小學校に於て開かれた
愛國婦人會、教育會聯合主催の講演會で、二
時間五十分に亘つて話したのが最初であ
つて、その原稿を基礎とし、次で大正十三年

三月六日、金光教第十教區支部に於て、春秋
會婦人部講習會の爲に四時間餘に亘つて
講話した筆記録があり更に昨昭和二年十
一月十五日靈地婦人會で一時間四十分話し
た講演筆記がある固よりその時々々に應じ
て内容の取舍をなしたるが故に講演の度
毎に相違はあるなれど其の趣旨は終始一
貫して居る。而して春秋會はその當時よ

二

り屢々筆記録の刊行を要求して居つたが、
靈地婦人會の筆記が金光教徒新聞社員の
筆記に係るを以て同社よりも切にその刊
行を促して止まないのゆゑにその希望に
應ずることゝした。然るに他に重要にし
て急を要する調べ物が堆積して筆記を調
査する暇がなく新年早々漸く寸時を得て
此等の筆記録を閲讀するに、靈地婦人會の

三

分は簡単に過ぎ、春秋會の分はやく長編に
四
巨る嫌がある。止むを得ず愛國婦人會の
時の講案と二回の筆記とを併せて取纏め
んとしたのが問題が人生根本の意義をなす
もので、多忙なる昨今、容易の事でないから
一時中止せんかとも思つたけれども切な
る希望のある事とて、今はその大成を他日
に期し、題意要項を概説する程の意味で上

梓する事としたのである。讀者その不備
を咎むることなく、若しこれによりて日本
の『人の母』たるべき女徳修養上手引の一
端ともなるならば實に望外の幸福である。

昭和三年一月十日

七十三翁 佐藤範雄誌

目次

一序 言……………一

二現代女子氣風……………七

三人間と禽獸……………二七

四兩性の歸一……………五

五女の大役……………四

(イ)人類相傳の重任……………六

(ロ)國民相傳の重任……………六

(ハ)子孫相傳の重任……………七

六産前産後…………… 二

七人の子を人にせよ…………… 三

(イ)人類としての人…………… 六

(ロ)國民としての人…………… 九

(ハ)子孫としての人…………… 一〇

八子孫の教師…………… 一五

九女の一念…………… 一六

十結び…………… 一三

人の母

一 序言

皆様よくお集りでありました。これから「人の母」と題してお話しするのであるが、人の母と云ふからには人間以外にも動物中に父と云ふか母と云ふものが居る。其は何かと云へば禽獣である、禽獣にも雌雄と云ふて父もあ

り母もあり、犬でも猫でも猿でも皆母がある
が、こゝにお話しするのは禽獣でない人間の
母親といふ義である。禽獣ならざる人間の
母についての話であるから、その邊先づ御承
知を願ひたい。
扱て今日の世は文化の世と云ふが、文化とは
文明開化の四字を約めて云ふやうである。
明治の初めから使はれた文明開化は、多く政

治の上や機械的物質的事で、世の中が段々
進み開けて極めて美しく立派になつて來た
事を云ふのであらう。成る程行燈やランプ
の時代と較べれば電氣や瓦斯が輝いて立派
であるが、果してさう云ふ事が眞の文化の意
であるか。文化とは精神生活には關係なく
て物質的の發達のみを意味するやうに使は
れてゐるらしいが、文明開化も文化も共に本

末あり、精神の文化が本であつて物質の文化
は末であらねばならぬ。元來文化は精神
生活、精神美の意義でなくてはならぬ。今頃
稱へられつゝある文化は其の本末を忘れた
る文化ではあるまいか。
さて現代の進歩した教育を受けたる女子に
は、多くの善行、嘉言、良風、美談等が無くてはな
らぬ筈であるのに、それ等を見聞すること極

四

めて少く却つて缺點の數々を見聞するのは
甚だ不愉快であつて遺憾に堪へない次第で
ある。此は思ふに、善事は兎角蔭にかくれ易
く、悪事千里の諺の如く、小さな善からぬ事
が遠く廣く傳はるこいふ結果でもあらう。
併しまた思ふに今の世は文化と云ふなれど、
未だ學校教育と家庭訓育とが調和して並び
進んで居らない事情を物語りつゝあるでは

五

あるまいか。お互に注意して眞の精神文化
の世を建設したいものである。志ある方々
が眞の婦女子の修養を積み祖先傳來の日本
婦人の眞面目を開く事に御盡力を願ひたい
のである。人固より母一人の力で此世に生
れ出づる者でない事はいふまでもないが母
たる婦人の力が七八分もはたらいて人を人
の子らしく育て上げるのである。此の事を

六

理解せねばならぬから「人の母」と題した意味
を一言述べたのである。この人の母たるべ
き資格は文部大臣や地方長官の辭令ではな
く天命天職として命令せられて居るもので
ある事を先づ自覺して貰ひたいのである。

二 現代女子氣風

近來女子に新しい言葉が流行する。其は女
子解放と云ふ事である。新聞雑誌に書かれ

七

又女子の口からも聞く事であるが、女子の解放は如何なる意義か。解放といふことが自由といふことであり、その自由といふことが或る種の女子に見る如き我儘に振舞ふことであるならば、日本の貴き婦徳を穢すことである。それが婦人の人格向上といふことであるならば、無論結構な事であるけれども、時に反動的態度の振舞あるに於ては、日本女

子を今日までにつくり上げた祖先の精神努力を無視したものである。尤も儒教や佛敎の女子小人、女子罪障観が餘りに女子を壓迫し過ぎた其の反動の結果も無視する譯にもゆかぬが、要するに反動的であるだけに今日の女子は事實危険状態に置かれて居る。現今女子教育が非常に盛になつて居るが、女子の爲に眞實の意味に於て幸福であるといへ

るかごうか甚だ疑はしく思はれるのである。
又女子の教育に就て母親達は如何に考へら
れて居るか老人には分りかねる所がある。
最も近い例だが東京のある高等女學校で課
した問題に對する生徒の答案が新聞に載つ
て居つた。長いから約めて話してみよう。
八十名の生徒について日用品の値段を問ふ
た中に米一升の値段を壹圓五拾錢から七錢

まで書いて居る。中には四拾錢五拾錢のや
ゝ近い所を書いたものも少しはあつたか。
如何に上等のお嬢様にしても少しは眼に映
りさうなものではないか。米屋の前を通れ
ば一升何拾錢と書いてあるではないか。併
し吾々は町を通行するにキヨロキヨロと米
屋の店なご見て通らないから知らぬと答ふ
るならば夫れまでがあるが何ほご高いとて

一 升壹圓五拾錢の米がここに
あるか。又これほご安いで七
錢の米がここに
あるものか。次に卒業した
後如何にするかこの問に
對して、百人の中六十人
までは直ぐお嫁に行
くご答へた。一升の米が七
錢や八錢ご云ふやうな
ものが直ぐ嫁に行つて
それで安心出来る妻ご
なれるであらうか。又私
は職業に従事いたしま
すご答へたのが百人の中
廿五

人あつた。それからあなた
方はそんな夫を理想とする
かの問に對し、音樂、美術
や芝居に理解を有つた男
を夫に持ちたいといふのが
百人中九十幾人で殆んど
全部であつたご云ふ。家
を持つに經濟の頭腦があり、
質素勤勉に働く眞面目な
夫を望むなご云ふ者は無
かつた。これが一口に今日
の女子教育の結果である
かごうか一概には申せぬ
事である

一四
が、そんな積りで學校へやつて居るか尋ね
たら、その親達は大方否と申されるであらう。
然しながら此れは事實であるから如何とも
ならぬ。又某縣農村に新設の女學校第一回
卒業生三十六人に就て卒業後の志望を問ふ
た所、農業に従事致しますと答へたものが僅
に七人、他の二十九人は皆銀行會社や役人の
妻になりたいと書いて居つた。かゝる考で

一五
は新思想がよいのか舊思想が悪いのか判断
に苦むではないか。かゝる氣風を有つて
居るお嫁を貰はんとする家が農村に幾軒あ
らうか。中には望む家もあらうが、大方はか
ゝる氣風の嫁を貰つたら、其家の家業家職を
嫌ふのであるから、舅姑と共に満足に暮す家
庭をつくること云ふ事は出来ないであらう。
それも若い間はよからうが、芝居や音楽

一六
や見物ぢやこ其處へも彼所へも、それもよし、
此れもよしと呑氣に遊び暮す事の出来る家
庭がこれも亦如何に都會なりとて百軒中幾
軒あるであらうか。女子の氣分がかゝる方
向へ走りつゝありとすれば、日本國情に於て
教育上一大考慮を要しはしないか。
今一つ深酷な實例を擧げて見れば、某縣西端
に位する郡部の青年狀態を今夏聞いて驚い

一七
た事がある。それは青年等が月給は少くても
何でもよいが役場の書記とか学校の教員
とか會社員とか云ふ肩書を切りに望むと云
ふ事である。それは何故であるかと聞けば、
相當の資産はあつても、唯農業だけの男には
女學校を出た女子は嫁に行く事を嫌がるか
らである。云ふのである。この話を聞いて、
かゝる女子の心理傾向で進みたらんには農

村は益々疲弊する。農村の疲弊も女子の心
行きにある。夏ながら心を寒うした事であ
つた。今後農村救済問題は女子精神問題で
あることも云へるが如何にや。今や若き女子
は實生活の觀念を離れて居る。此のせち辛
い世にさう云ふ女子と結婚する子を産む。
かゝる女が母となつて行く事は眞に國のた
め甚だ憂慮に堪へない事ではあるまいか。

夫が一日の勞を慰する家庭でありながら斯
る家にて如何にか勞を忘れ得られやう。こ
れが現代女子青年氣風である。すれば今日
の女子教育上何ぞか考へねばならぬ。併し
これが一般女子教育の罪である。とは言はな
い。女子教育當事者は種々苦心焦慮して日
本女子の將來を考へつゝ教育して居る事勿
論であらうが所謂社會の空氣を申して人々

二〇
の氣分鼻息が斯くあることは、現代文化の弊
である。と觀るべきで、決して教育者のみの罪
と斷ずる譯にはゆかぬが、兎に角斯る女子と
縁組して家を有つて行かねばならぬ者は實
に不幸である。尙ほ一二の實話を附け加へ
て置かう。

これは大正十四年の事であるが、或家に女學
校出の嫁をもらひ、宅の嫁は女學校卒業生と云

ふので自慢らしく思つて居たが、其の嫁に御
飯を炊かせた所、茶釜で御飯を炊いたこの事
である。又女學校出の嫁に一尾の鯛を料理
せよと云ひつけた所が、胴體を三つに切つて
佃煮のやうに醬油で煮付けて了つたので一
家困却したといふ話を聞いた。又某女は女
學校卒業後、或金光教々師の宅に修養に来て
居つた時、主婦が晝食の仕度にかゝり、その女

子に鯉節を削りくれよと命じおきて、買物に出で歸り見れば、また鯉節を削つて居る。見れば一本の鯉節を大方削りつくして居るのでこれはご思つたこの事である。其の家は僅に夫婦に幼児と四五人の家であるから、この位削ればよいと誰にも見當のつく事である。あきれはてたご云ふ話であつた。此等は聊か極端な話であるけれども實際の事である。

あるからたまらない。昔徳川時代には、分限者の娘は、琴三味線上等藝術は學ばしても、女中のする飯炊なごさせぬを自慢にして、内の娘は御飯を炊く事を知らぬごいふを誇りごしたのも居つた。當時の落語家は「お話しには上中下三段ごありまして、上は歌、俳諧、琴、三味線、中は飲氣に食氣、下は色氣に雑談」ごよく申してゐたが、現時の

青年女子も昔のまゝのお嬢様に育てつゝあ
るのであらうか。此の生活難を訴ふる世の
中に茶釜で飯を炊き生きた鯛を三段に切つ
て佃煮のやうに煮つけられては如何に女房
最負の御亭主もあきれた事であらう。西洋
料理の眞似もよろしいが何んど云ふても日
本には祖先傳來の料理法もある。教ふる者
も教へらるゝ者も國情否土地柄を考へた教

育が必要である。併し今は山間僻陬の者も、
何時お江戸の眞中に嫁入するかも知れぬか
ら其の爲にこいふ方針ならば其は別の事と
したい。かゝるお嫁さんが間もなく母とな
るであらうが母となつた後は年取るまゝに
引締つても往くであらうが實生活に必要な
教育も訓育も願ひたいものである。
扱て茲に警戒すべきは猶太人が自由平等を

二六
やの女子解放ちやの云ふ礫を投げて、世界的大陰謀を企て、華美文弱を流行させて、日本婦人の徳操を亂し墮落させやうとして居る。こいふ事である。猶太人の陰謀に就ては、既に「猶太人の陰謀」と題してお話しておいたので、こゝでは畧する事にするが、近來妙齡の女子の中に、女優や二ハカ師に眞似たやうな服装をして得々たる者が多い。實に見苦しき

事である。これが現代女子の輕佻浮薄を物語つて居る。かゝる服装に包まれて居る思想や知るべきではないか。これより「人間と禽獸」に就てお話を進める。

三 人間と禽獸

人間とは禽獸動物に對しての名である。人間と禽獸とは其の形の上から見るとは直ぐ様見別けもつくが、其の爲す所作に至りては

區別する事が中々むつかしい。人間は神の子ちやの萬物の靈長ちやのこ大層尊いものやうに思つて居る。元より尊い者には相違ないが然らば人間は何處が尊いか禽獸は何處が卑しいかと尊卑の區別をつけ様とする中々面倒である。其の一二を舉げて話して見よう。

二八

がある。それならば人の言葉を真似る鸚鵡と云ふ鳥が居る。又九官と云ふ鳥が居る。其の鳥は吾人の語るここの出来ないお俊傳兵衛も語る。玄關番をさせておけば「入らつしやい」「お歸り」と云ふ。言語を持つて居るからこて威張る譯にゆかない。言語は使はぬが昔から人間のする演劇の太閤記や忠臣藏を猿芝居犬芝居にもする。然らば人間は

二九

文字を持つて居るから禽獸より尊いといへば世界には文字を持つて居らぬ人間がをる。眼に一丁字もないと云ふ人が現在世界の一等國に列して居る我が日本にも未だあるではないか。かゝる風で人間と禽獸との區別は中々つきにくい。進化論者から云へば人間と猿とは先祖が一つで即ち人猿同祖と云ふて居る。なる程猿は人間によく似て居る。

が、ここが違ふか云へば、只違ふ所は猿は後肢より前肢が長い。人間はほゞ足と手が釣合ふて居る。その長短は兎も角もあれ子を愛するといふ事に至つては子を捨てる人の親はあるが子を捨てる親猿はないと云ふ子が獵夫に打たるゝならば親も共に打たれると云ふてはないか。子を愛するといふ點に於ては人間より優ることも劣りはしない。

云へる。情愛に就ては鶴を見よ。鶴が卵を孵す時の状を見よ。雄鶴が雌鶴を守る情愛は人間も及ばないといふことである。又鴛鴦を見よ。雌雄の和睦のよさは彼の鳥に倣ひたいといふ男は居らぬか。女は居らぬか。斯う云ふ様に徐に人間に對して禽獸を較べて考へて見ると、何程人間と禽獸とが區別がつくか。中々つきにくい。プラトーンと云

ふ大學者に、或者が人間とは如何なる者を云ふかと尋ねた所、人間とは毛のない二足直立動物であること答へた。尋ねた人は暫時待つて呉れと奥に入り、鶏の毛を抜いて首を片手に握り、それならこれが貴下の云へる人間であるかと云つた所、何とも答へやうがなかつたこと云ふ話がある。以上は人間と禽獸との區別が容易につかないといふ事を分り易く

お話ししたに過ぎないので、私は學者の生物的
研究からでなく、精神方面から見、次の五項
目を擧げて特に人の尊い所以を述べやうこ
思ふ。

- (一) 人間は天地の眞理を知る
- (二) 人間は恩義と禮讓を知る
- (三) 人間は子孫に教育を施し、永久の慈愛と責任を有つて居る

- (四) 人間は宗教を有つて居る
- (五) 人間は天然を支配するが、禽獸は天然に支配される

第一「人間は天地の眞理を知る」。かく云へば、
禽獸は直ぐ反駁するかも知れぬ。人間は天
地の眞理を知ること、は出来ても、之れを守ら
ぬ者が居るではないか。反問されたとして、
返答の出来ない様な人間は無いであらうか。

三六
第二に「人間は恩義と禮讓を知る」と云へば、鳩に三枝の禮あり、鳥に反哺の孝あり、犬は主恩を知る、云ふ事がある。人間にして親の恩を知らず、主恩を知らざる者はないか、と反問されたら、返答の出来にくい者はあるまいか。第三に「人間は子孫に教育を施し、永久の慈愛と責任とを有つて居る」と云ふが、禽獸も乳を飲まず、餌を啄む、ここを教へ、自活の道を與

へて居る。人間にして子を産んで乳を飲まず、捨てる者があるが、此は如何に、と質問されたら、困却する人間はないであらうか。第四に「人間は宗教を有つて居る」。これにも亦反問がある。相當の學問知識を有つて居りながら、余は無宗教なり、と云ふ者がある。此は如何に、と質問されて、返答の出来ない人間はないであらうか。否、人間にして反つて

吾々禽獸を祀つて日々拜んで居る人間が居るではないかと突込まれて動物に對して赤面する様な人間はないであらうか。
以上四項目を擧げて區別しようとして試みたが立派には區別がつかない。今一項擧げて見る。
第五に「人間は天然を支配するが禽獸は天然に支配される」。此れのみは禽獸も反對が出る。

來ない。禽獸は寒い時分が來れば穴の中、土の中に這入るものは這入る。籠るものは籠る。川魚などは秋の彼岸から春の彼岸までは何も喰はずに生きて居る。子を産むと云ふても犬猫牛馬皆一定の期間がある。即ち天然の命じた期間の外は交尾もしない子も産まないが人間はいつでも結婚しいつでも子を産む。又天然に就て云へば水は火を消

すものなるに其の水の力で電氣を發し、燈を
點ける。これは禽獸では出來ぬのである。
山野に草木の生ふるは天然であるが、其の草
木を拂ひ山野を開く。これ天然を支配する
のである。又禽獸が築いた池もなければ又
運河もない。人間はよく池を築いて水を貯
へる。又寒さが來れば暖い物を着る。暖い
ものを喰ふ。暑さになれば涼しい所にも行

く。斯くの如く人間は天然を使ふが禽獸は
それが出來ない。ここは人間と禽獸と著し
く違ふて居る處であると思ふ。
斯く五項目を擧げて來たが、唯一項だけ禽獸
の反問を受けないで他の四項目は皆反問さ
れる。此れは極端なる假設的の比喩話の
やうであるが、かゝる實際事實は吾人の多く
見聞する所ではないか。禽獸が我々人間の

行爲につき質問や議論を吹きかけて来たならば中々困難な事であらう。實に人間の中には道理も恩義も知らぬ者があり又人の哀れを哀れごも思はぬ者がある。それであるから人間自らが往々「彼れは恩義も禮義も知らぬ畜生のやうな者ぢや」。ご云ふではないか。此の言葉は人間の口から出づるご雖も人間への天の誠めの言葉であらう。皆人間

ご思ふて居るが人間の中に人間らしくない者が多く居る事知らねばならぬ。そこが我々の恐ろしい所である。「人間らしくせよ、ごは人倫道德上の千言萬語を約めた訓誡ご思ふが如何にや。斯くお話し來りて思ふに、人間ご禽獸ご著しい相違の點は、禽獸即ち犬でも猫でも鳥でも皆手足が自分の方へ何もかも搔き寄すやうになつて居るが人間は兩

手の掌を上にして物を持ち先づ貴殿より召
し上れと禮を手に表はして差し出す。禮儀
は人にして初めて爲す所である。此れが禽
獸では出来ない天理天則が定つて居るので
あるが多くの人間の中には先づ貴殿からと
云ふ謙讓の徳を失つて、なんでもかんでも自
分一人がよければ他人の事はかまはぬ、自分
の方に取込み搔込みさへすれば好いと云ふ

人がある。其は天理天則に背き眞の人は
云へないやうに思ふが如何にや。そこで天
神の神勅あり、皇祖の神勅ありて人の道を教
へられ、其の後聖徳の人が出て人間の通用す
る道と禽獸の通用する道とを區別した。此
の目標を見て進む者が人間で、それを通らぬ
者が禽獸であるとした。即ち禽獸と人間と
を區別して其の目標を定めた。其は何か、本

來支那から來たのであるけれども我國の道徳に同化せられた事であるから分りよい便宜に従ふてその目標として五倫五常を掲げる。五倫とは五ヶ條の人の道の教である。

一、父子親あり

二、君臣義あり

三、夫婦別あり

四、長幼序あり

五、朋友信あり

第一に父子の間は親の親愛と子の孝心によりて立ち、

第二に君臣の間は義に依つて行はる。義は宜にして、勅語に「義ハ君臣ニシテ情ハ父子ノ如シ」云々宣ひし正しき道である。

第三の「夫婦別あり」は物を區別する事で他人と他人とが約束に依つて相頼り一心同體

四八
こなつたのであるから、其の間に吾は夫たり
吾は婦たりこの自覺を以て、夫婦の別を明に
せねばならぬといふのである。別は夫婦
の禮を亂さるやうにせよこの教である。
此の別を忘れた時に夫婦喧嘩が起る。四海
波を歌ふて婚禮をした夫婦が摑み合ふて喧
嘩をして居る。これを犬猫が見て、これく
人間殿其の様な事をするのは吾々犬猫のす

る事ぢや。人間は吾々を常に畜生々々く卑
しめて居るが人間も吾々の仲間に墜ちこん
で来たのかと質されたら、定めし顔を赤くす
るであらうから、眞人間は滅多にせぬ事であ
る。
第四は長幼序ありて、大人と幼若との間には
それく順序がある。大人は小さき者を憐
み慈くしみ、小さき者は長者に従ふて行かね

五〇
ばならぬ。先生と弟子、先輩と後輩、上役と下
役と皆同様である。
第五は「朋友信あり」。朋友同志には信即ちマ
コトがなくてはならぬ。マコトがあつて信
ずる事が出来る。朋友互に相信ずる事が出
来ぬ時は人の世間は狭いものである。朋友
交を厚うする術は唯信と云ふマコト一つが
大切である。

以上の五ヶ條は極めて古き教であるが、如何
に世が進むとも開けることも、此の五倫の道を
失へば禽獸道に墜ちるのである。
次に五常を説く。常は人間常道の常であつ
て、即ち仁、義、禮、智、信の五つの常道をいふので
ある。
第一の仁の字は、餘りに意義が深くて一言に
はいひ難いが、分りよくいへば、仁は人の道と

いふ義で人偏に二の字で二人を合せて一つ
とす。人が二人以上居ればそこに必ず道が
なくてはならぬ。そこで互に道徳を守らね
ば人の世は平和圓滿に生活する事が出来な
いから仁の一字が人の道たる根柢をなす意
である。仁は仁恵、仁愛ともいはれる。人間
道徳根本の徳である。
第二の義は義理の義でスジミチの正しきを

いふ。是非善悪を判別して是に従ひ善を行
ふ力である。此の力のなき者は人間たるの
面目は保てない。
第三の禮は禮儀の禮で心に敬を有ち行に
人の履む則を守ることである。人間に禮
儀と云ふ者なかりせば直に禽獸道に墜るの
である。「禮儀は喧嘩の豫防なり」と花田報徳
子は云ふて居るが如何にもさうである。互

に禮儀正うして居る者の中に喧嘩の起る譯がない。喧嘩の起るのは禮の亂れである。第四の智は智惠の智で、智は心の明である、心の光である。此の智の光で道理の道も判別する事が出来るのである。人若し此の智の光明を失へば恰度闇の夜に山路を行くが如しであらう。

第五は信である。信と云ふ字は人偏に言と

云ふ字を合せて一字となつて居る。此の意は人の言に虚詐があつたら人ではない。そこで人と言とを合せてマコトと訓せたのである。仁儀禮智の四徳も此の信のマコトがなかつたならば何の役にも立ぬ。悉く虚詐となつて了ふ。マコトを失へば即ち人間を失ふのであるから此れを守れよと教へたのである。尙いへば信は神佛を拜む大切な信

心の信でもある。次の一首は未だ教祖生神
の在せし明治十六年御教の數々を日々承り
居りし時に範雄の口すさんだものである。

まこここそ人の道なれたからなれ

うしなふ心いききたわさはひ

青年ながら神の御前で叫んだる事である。

聞く人如何にも解せられたし。

以上文字の講義なご面倒な事を話しました

が、此れは要するに人間も人間の道を踏まね
ば禽獸に等しいといふことを申したのであ
る。禽獸には親子ありても禮あらず、鳥に反
哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり、なご云ふな
れ、此れは自然的の現象であつて、知つて行
ふことは思はれない。従つて君臣、父子、兄弟、夫
婦、朋友の間の道理、信實なごいふ高尚なる道
はない。所謂畜生道である。吾人々間は人

間の道を守り、禽獸と區別判然として人生の
發達を期せねばならぬ。往々人間らしくな
い者が人間の中に居る事を見て吾を愼しま
ねばならぬ事を話したのである。

五八

四 兩性の歸一

兩性とは男性女性の事で、兩性の歸一とは男
女の歸一と云ふ事である。人は此の世に男
子と生れ、女子と生れて來たばかりでは、智者

も學者もなく、只人間の子である。其の人間
の子は生れた時は吾れ男子である、女子であ
る。云ふ事は知らない。生ひ立つに隨ひ親
の教によりて男女の區別の辨へがつきかけ
る。女の子は自然に赤や桃色を好み、男の子
は自然に白や黒色を好むと云ふやうになつ
て來る。女の子は子守の眞似や炊事をする、
男の子は角力の眞似や戦争の眞似をする。

五九

云ふやうになつて来る。中々男女の區別の
自覺は容易につかないが親が坊は男の子ち
や。お前は女の子ちや。男の子が泣いてごう
するか、女の子が其のやうに荒々しい事をし
てごうするかと云ふやうに親の育て方によ
りて男女の區別が分り出す。漸く生ひ立つ
に隨ひ此の區別が出来て、私は男だ私は女だ
と自覺がついて来る。それが段々成長する

に隨ひ判然として来て男性は女性に、女性
は男性に頼らんとし、自然の間に相愛の精神美
が起つて茲に始めて結婚が起る。この結婚
を名けて人生の大禮と云ふ。結婚は人生一
代の出發點たる儀禮である。此の結婚は人
生五儀の一つであつて、人生五儀とは一誕生、
二成年、三結婚、四相續、五葬儀をいふ。是れ人
生五つ度の儀禮であるが、第一の誕生と第五

六二
の葬儀は、聖人君子何人も吾身の處置は吾
身では出来ないから、先きに生れた者、後に
遺こる人の世話にならねばならぬ。これに
人道、深い意義があるが、それは人生五儀禮
と題して別に詳しくお話しする時があらう。
次の成年式や相續式などになる。禮を畧す
る者があるが、之もこゝでは申すまい。さて
第三の結婚であるが、此の結婚によつて人生

の資格がつくのであつて、今までは只息子娘
子であつたのが、結婚によりて先づ男女二人
に夫婦といふ名がつく。妻よりは夫と呼び
夫よりは妻と呼ぶ事となる。又親を呼ぶに
舅姑の名を以てする。此の名によつて各々
夫々に其の責任が生ずる。所謂一人身の如
く自由にならぬやうになる。其の不自由が
即ち人として天地の公道に進む所以である

事を自覺せねばならぬ。結婚は男女二人が一人の如くなつて一心同體の活動となるのである。此れを兩性歸一と云ふのである。此の兩性歸一によりて妊娠と云ふ事が起るのであるが、妊娠は實に重大事である。茲に於て女の大役が生ずる。

五 女の大役

女の大役とは妊娠分娩育児の大役である。

此の尊い女の大役を陰陽道九星判断の妄誕無稽の迷信から女の大厄と考へて居る。此の厄の字は厄難災厄の厄の字であるが、女の妊娠分娩育児が災厄であり厄難であるなら結婚は女の大難の初めであらう。そんな馬鹿な事はない。此の馬鹿氣た迷信が眞劍に行はれて居るから大難も受け難産もするのである。然らば女の大役とは何を云ふので

あるかご云へば人の母となる大役である。
この女の大役の責任を大別すれば左の三項
である。

六六

(イ) 人類相傳の重任
(ロ) 國民相傳の重任
(ハ) 子孫相傳の重任
此の三大事は女子の天職としての大役であ
る。前に人間と禽獸との區別に就て大體を

お話し申したが人間と云ふは世界中の人類
の事であつて、

(イ) 『人類相傳の重任』とは、世界人としての
人類の責任である。この人類相傳の大役を
務むるは偏に女の天職であつて、世界の眞の
文明が此天職中に胚胎する所以があるので
あるけれども、廣汎に渉るこゝであるからこ
ゝには略するこゝとする。次は

六七

(ロ) 『國民相傳の重任』である。禽獸動物には國家もなければ國交もないが、人間は國を建て主權を戴き國籍を有たねばならぬ。國籍なき者は世界の風來者である。風來者は人間取扱の外であるから其は論外である。人間は何所かの國に住み必ずや各々其國の發展を圖り其國を守る國民であらねばならぬ。日本國は日本國民之を發展させ之を護

らねばならぬ。従つて日本國民は日本國民が傳へて行かねばならぬのである。殊に日本ほんの如ごとき世界せかいに類る例れいなき萬世ばんせい一系いつけいの天皇てんおう陛下へい下かを上かみに戴いたき義ぎは君臣くんしんにして情じやうは父子ふしの如ごとしこ宣のたまへる尊嚴そんげんなる國家こくかに於おて、此この國民こくみん相傳さうでんは日本にっぽん婦人ふじんに依よらずして何れいづの國くにの婦人ふじんが相傳さうでんするや。此こを思おもふ時とき日本にっぽん開闢かいびやく以來いらい神々しんより祖先そぜんが傳つたへたる血液けつえきを濁にごさず汚けがさず、

大和魂を有する日本人を日本に傳ふるは現在及び將來の日本婦人の一大責任であつて實に大役中の大役である。次は深く感ずるのである。

(ハ)『子孫相傳の重任』である。子孫がなければ家は絶える。家が絶えれば國も無くなる。ごこまでも我々の子孫は我々が傳へねばならぬ。此れは人間ばかりでない。生き

ごし生けるものは皆我が子孫を傳へようごして居る。禽獸でも猫は猫の子孫、犬は犬の子孫、草木の末に至るまで各々さうである。古歌に

開らけてもいばらからたち拂はずば

またうもれやせむ野中古道

ごいふのがある。荆棘拘橋のさげありて手に觸るゝ事もならぬ叢を開き人の通れるや

うに道を作つても根が残つて居つて跡に生
へ出づる荆棘を常に拂ひ除かねば又元の叢
になるから道づくりを怠つてはならぬ云
ふ意である。此の通り切り拂はれても荆棘
拘橋は吾が子孫を傳へ子孫の繁昌を圖つて
居る。子孫相傳は生きこし生けるものゝ通
則である。況んや人は天が下の靈物なり又
人は萬物の靈長なりと稱し來れる人間であ

る。其の家の子孫を傳ふる事は其の先祖に
對し現在及び將來永久に生くる道であつて、
婦人一人の力ではないけれど婦人なかりせ
ば如何にしてもなし得ない事であるから子
孫相傳の大役は女にありと云ふのである。
此を思ふ時吾々は母に對し世の婦人に對し
感謝の念を禁じ得ない。我教祖生神が家繁
昌子孫繁昌を以て重き御祈願となされたの

は實に尊い事である。近時産兒制限なごい
ふが其は余の論外である。又近來優生學ご
いふ事が唱道されつゝあるが優生學ごは一
言にいへば精神上にも肉體上にも遺傳の懼
れある惡質の病氣を有つて居る者や、虛弱の
者には國家の法律を以て結婚させぬやうに
して精神身體共に立派な人間の子孫を傳へ
やうご云ふのであるが、今はこの優生學に就

てお話しする暇はない。

今上陛下は昭和元年十二月廿八日朝見の御
儀に於て「民族ヲ無疆ニ蕃クシ」と宣はれた。
「民族ヲ蕃ク」するは我國民の子孫繁昌とい
ふことである。子孫繁昌は女の大役を全う
することによつて得られるのである。此は
男女協同の精神的結合の力によること勿論
であるけれども、子孫を育て教へ導く日夜の

務が重に婦人にあるからである。

六 産前産後

この産前産後云ふ項目は教祖生神の教の中にある言葉其の儘を採り來つて一項の名稱致したのである。産前産後に就いて教を蒙られた一番初の御信者は教祖の奥方即ち一子大明神で次いで西六金照明神である。教祖は此西六明神に「女の道は女で開

け」ご教へられた。其の内に籠つて居る教事である。此の産前は妊娠中の心得べき教であつて産後は分娩して後の教である。男女歸一に至れば女の大役の生ずる事は前段に説明した。教祖は「子を産むは我力で産むは思ふな皆大祖神の恵む處ぞ」ご教へられた。これが産前産後に就ての第一の教である。男女歸一すれば油断してはなら

七六
ぬ。妊娠は半ば人間の力、半ば天意に出づる
もので、神人合一の力である事を教へられた
のである。神の靈を受けて人間が人間を傳
へるごいふ事になるのである。當時やかま
しかつた妊娠中腹帯をする事を教祖は止め
よご教へられた。即ち「懷妊の時腹帯をす
るより心に眞の帯をせよ」この御神訓を下
された。此の御神訓を拜して當時の人々は

七九
驚いたのである。腹帯は日本の歴史上から
いつても神功皇后の三韓征伐の時になされ
たと傳へられて居る長い習慣であるから驚
いたにも無理はない。今は産科の醫學が進
歩して迷信の事は段々廢れゆくやうであ
るけれども、教祖御時代否今日も雖も腹帯に
就ては中々やかましい。教祖は此のやかま
しい腹帯をするより心に眞の帯をせよご仰

せられたのである。これは解釋をせねば判
らぬが眞の帶は妊娠中の謹慎を教へられ
たもので、帶をしめて居ても心が緩んで居つ
てはならぬ。腹帶をして苦しむより心の中
を眞にして慎を忘れな。さうせねば決して
良い子供は出来ぬぞ。教へられたのである。
妊娠中は神の靈が我が胎内に宿つてござる
のであると云ふ大切な心を有つて心を正う

し、決して邪惡の心を持たぬやう、身の上
に過なきやうに心得ねばならぬ。そして分
娩の時に當つて何方の方角を向いて産むべきか
と方角を見たりするが、方角は見ても、何月何
日何時に生れると云ふ事は見當てる事は出
来ぬ。教祖は「方角や日柄を見るに及ばぬ。
方角が心配なら此の方の神の棚の方へ向つ
て産め、守つてやる」と教へられ、又「出産の時

よかり物（凭るものゝ意）によかるより神に心を任せよかれよ」
「産後は平かに安心に常こ變らぬ心で居れ」
「産れたる子には五香いらず母の乳を直ぐ吞ませ」
「常に教へられたのである。又御理解に女の身の上、月役、妊娠、悪疽に腹痛、まず腹帯をせずして産前身軽く隣り知らずの安産。産後よかり物、團子汁をせず。生れた子に五香要らず。母の乳を直

ぐ飲ませ。頭痛、血の道虫、氣なし。不淨毒断なし。平日の通り」
「こある。これ教祖生神の宣言なり。此の教の通りをすれば産前産後の病はない」
「こまで諭されたのである。此れが安政の初の神諭であるから世が驚いたのは當然な事である。教を疑ひつゝ信心した者は難儀した者もあつたが眞に守つた者はおかけを受けた。吾々の内も其の通り

であつたのである。「此の方の云ふ通りを守
る者には隣知らずの安産をさせる」ご教へ
られたのである。隣知らずごは其の隣の人
さへ知らぬ位に安産が出来ることである。
安産が出来れば従つて其の子の生立ちもよ
い道理である。實に御親切に教へられてあ
る。余の妻は子供を七人生んだが、豫て「自
分の子供は自分が取上げよ」ご仰せられた

如く妻一人で産んで一人で取上げて居るの
である。湯を沸す丈けは家人に沸して貰ふ
たのであるが早や其の翌日は神の前の御用
を務めたものである。余はいつも本部の御
用やら巡教にて留守であつて歸りて聞くば
かりであつた。これは西六金照明神もその
通りである。尙よく當の本人に就て直接尋
ねて見られるもよからう。併し自分が産ん

八六
で自分が取り上げるなご云ふ事は現代の
人ご雖も、教祖御道の初の時代の人の如く驚
くものがあるかも知らぬが今は産科の醫學
も進歩し專業の産婆も居るからその手を待
つもよからう。隣知らずで安産が出来たら
産婆を呼ぶ暇もない場合もあらん。先づ神
の教を信心して時の宜しきにするがよから
う。信心はして居つても御教を守らぬ者は

八七
昔も今も同じ事で、おかげは受け得られぬ。
世には斯う云ふ事を云ふ者がある。妊娠の
者を見て、「貴方はお壯健でないやうである
が、御要心なさい」と。壯健でないごは妊婦を
病人ご見たる言葉であつて、心得なき挨拶で
ある。「貴婦は御日出度いさうでありますか、
御信心をなされませ」と云ひたらんにはこの
位氣持の良き事か。それを無理に病人扱に

八八
する者がある。若し妊娠が病氣ならんには、
其の病根は體中に居る小供である。謂はね
ばなるまい。以後心得べき事である。教祖
は又教へられて「普請作事の事は先きが長
いから分らぬ事があるが、妊娠は始めから九
の月十月立てば直ぐ分るから、此の方の教通
りを守つた者を守らぬ者は判然と分かる」
と教へられた。明治十九年十一月「造化機論」

八九
と云ふ書物を見たことがある。其の中に産
前腹帯の弊害を論じてあつた。其の後「産前
産後」に云ふ一書を見た。之れにも腹帯の弊
害を醫學専門の人が説明して居つた。其を
見た時、今は學問が開けて産に就ての迷信も
教祖の教の通りに取り除かれる事になつた
か、とありがたく思つた事を思ひ出したまゝ
に話して置く。

余が以前御廣前でお取次をして居つた頃、此の記念館(藝備教會所 邸内にあり)より見ゆる大江村源太の六十餘の婆さんが自分の娘の妊娠して居るのを連れて参つて、その婆さんが娘に向ひ「お前、よく聞きなさい。妾は妊娠にこんな苦勞をした事か。妊娠中風呂に入れば腹の子が湯で太ると云ふので、風呂の中で姑に腹帯を固く締められる。又寝て居れば寢室に来て

俵を締めるやうに締められて随分苦しんだものである。妾も今一度金光様の教の道で子を産んで見たいと思ふが、此の年になつてはそれも叶はぬ。お前が此のお道にお縋りして安産が出来ると思へばありがたい事である。物語りながら嬉し涙を流した事がある。此れは明治十三年の事である。神の氏子が神の氏子を産むと云ふ信念をもつて産

九二
み神の氏子が生れたら直様それは天皇陛下
の御民が生れたのである。それを思へば其
の子を眞の人間に育て上げねば相濟まぬこ
いふ事を深く感ずるであらう。これ眞に大
役である。「人の子を人にせねばならぬ」この
大役を自覺することは實に此の上もなき大
切な事ではないか。お互に人間として大い
に自重を要する次第である。

七 人の子を人にせよ

九三
人の子を人らしく育て上げるに云ふ事は前
にも云へる如く、人らしき人の標準が定つて
居るから實はむつかしい事である。其のむ
つかしい事を實行して來た吾人の祖先に對
し、子孫たる現代人及び將來の人は是非亦其
の實行に努力せねばならぬ。これのみは人
たる者の責任であるから嫌やでも應でも實

行せねばならぬ。人の子を人らしく育て上
ぐる事は尋常一様でないことを古人も自覺
して居つた。古歌に

人多き人の中にも人ぞなき

人ぞなせ人人ぞなれ人

と詠ふて居る。これ一面人の子と生れても
人らしき人に育てる事の難き事を戒むること
共に、一面人たる面目を保つやうな眞の人と

なる事を奨励した歌である。元來人間には
神的性能と獸的傾向との二方面がある。油
断してその神的性能を發揮させぬと獸的傾
向を暴露して獸的に墮落するものである。
然るに今日の進歩發達を遂ぐるに至つた事
を思ふ時は人が天然を利用し動物一切を支
配するに至らしめた人間祖先の努力に感ぜ
ずには居られない。

九六
(イ) 人類としての人^{ひと}が凡ての禽獸動物^{きんじゅうどうぶつ}を支配^{しはい}する權能^{けんのう}を有つに到つた事は實に容易^{ようい}ならざる努力^{りきよく}であつて、お互に人類として禽獸動物^{きんじゅうどうぶつ}に對しその支配者^{しはいしや}たる自覺^{じかく}と責任^{せきにん}を維持^ゐせねばならぬ。例へば嫁にくれ婿にくれ、やれ婚禮^{こんれい}ぢやの禮服^{れいふく}ぢやの四海波^{しかいなみ}を謠ふて人生^{じんせい}の大禮^{たいらい}を擧げた者が暫くするご夫婦^{ふうふ}つかみ合ひの喧嘩^{けんか}をする。それを犬や猫

が見て吾々^{われわれ}を畜生^{ちくじやう}々々^{々々}と云ふて蹴つたり叩いたりするが人間^{にんげん}等^らが今^{いま}して居る事は何うだ、咬合^{かみあ}ふたり喧嘩^{けんか}する事は吾等^{われら}犬猫^{いぬねこ}のするここだご云はれたら、これ禽獸動物^{きんじゅうどうぶつ}の支配者^{しはいしや}たる面目^{めんもく}を失ひ權能^{けんのう}を棄て犬猫^{いぬねこ}の仲間^{なかま}入^{いり}をするここ々々^{々々}なるではないか。人を欺^{だま}し物を奪^{さら}るに至^{いた}つては、人の隙^{すき}を狙^{ねら}つて魚肉^{ぎょにく}や獸肉^{じゅうにく}を盜^{ぬす}み喰^くふ犬猫^{いぬねこ}と同じ事^{こと}である。謹^{つし}むべ

九八
き事である。戀敵の爲に人を殺すなご毎日
の新聞を賑はして居るやうであるが言語同
断で禽獸動物に對して慚愧の至りではない
か。世の事態を観て人類ごして人間ごして
人間の面目を保つ事の易からぬ事を思はね
ばならぬ。何ごしても生れながらにして人
は尊き偉いものではない。只教によるもの
なる事を思はねばならぬのである。以上お

話し申した所は一般人類ごしての事である
が次に

(口)「國民ごしての人」ご云ふ事を考へて見ね
ばならぬ。國民ご云ふても露西亞支那の國
民ご日本國民ごはその素性が違ふ。「女の大
役」の項に於てお話し申した通り天地開闢以
來上に皇統一系の皇室を戴いて居る國民下
にあつて忠義赤誠に満ちて居る國民である。

一〇〇
上が萬世一系であれば下國民も亦萬世一系
で、神代以來天皇は國民を換へさせ給ふた事
もなく、國民も亦天皇を換へたる事なし。皇
室ご國民ごは本家分家親子の關係によりて
國が立つてゐる。是を地球上一つあつて二
つなしご云ふのである。かゝる尊嚴なる國家
かゝる立派な素性を傳へられた國民である。
斯の國を現在及び將來萬世不易に守る「國

民たる人」を産み育て行く事が國民ごして
「人の子を人にせよ」といふ事で、これが御婦
人方の一大天職たる大役ご謂はずして何ご
いふべきか。如何に亞米利加人が偉いの、獨
逸人が偉いのご申しても、これを亞米利加や
獨逸の人の血統に委す事は出来ぬ。日本の
國はごこまでも日本國民が相傳し、日本國民
が守つて行かねばならぬ。日本國民の母た

一〇二
 る者は日本婦人の外誰もないのである。今
 や日本人の中に日本人の血色を有ちながら、
 其の精神が露西亞人や獨逸人亞米利加人に
 ならんごして居るものはないであらうか。
 日本婦人日本人の母たらん者は此の一首の
 歌を心得てもらひたい。此は明治二十二年
 五月二十八日地久節に吾師三上一彦先生の
 廣島婦人會の爲に詠ぜられたものである。

捨てて甲斐あるものならば
 逆巻く波も打ち渡り
 燃ゆる燄もふみゆかむ
 さはさりながら女子の道
 内を守りて教育の
 業に心をつくしつゝ
 其の子を國の千城ご
 育て上ぐるも萬分の

國につこむる 忠義なり

此の歌は一讀のもと能く理解出来る歌である。『國民としての人』たる資格の内容は多くあらうが、此の歌の精神が總ての根本である。前にも云へる如く、今や婦人解放ちやの男子と同等の地位を與へよ、婦人に參政權を與へよなご運動する女子もあるが、其を惡いご云ふのではない婦人參政權の如きは運

動してもせいでも早晚容さる可きであるが、何れの國に於ても男子には男子の天職あり、女子には女子の天職あり、外國婦人の事は姑くおきて、我が日本婦人として考へねばならぬ。如何に文化進むと雖も、日本婦人にして此の歌の精神を失ひたらんには、如何に學問を子孫に施すも、眞の日本國を守る國民の母たる者ではないご云ふも過言ではあるま

い。此の歌の精神は過去現在及び將來の日
本國民の母の精神でなくてはならぬ。此の
精神を以て婦人は日本國民ごしての母とな
られん事を偏に願ひ致します。

(ハ)『子孫ごしての人』ご云ふのは明治天皇
の勅語に『朕カ忠良ナル臣民タルノミナラス
又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン』ご
宣ひし忠良なる臣民の子孫の事である。子

孫を産んで流石は親の子であるご云ふやう
に育て上げる事は容易の業ではない。産れ
たから育てるのであるご云ふやうな心行で
は立派な子孫は作れない。多くの人の中に
は、此の子が居らねば實家に歸へるのちやが、
今は子の爲に歸へれない。又もういらぬ子
が生れた。仕方がない育てねばならぬ。其
の子を捨てた心持からであらうが、おすてご

一〇八
か、捨吉ごか名をつけて乳を飲ませつゝも厄
介者ごして育てる人のあることを往々耳に
するところがあるが斯る心で育てられた子孫
ご、此の子は吾が産んだ子ではあるが神の御
靈を受け、陛下の御民であるこの眞心もて育
てられたる子供ご成長した後精神の働きが
如何に違ふか。三ツ子の心六十までこの諺
がある。此の諺の通りになる人ばかりであ

るかごうかは分らぬが吾人の経験によるご、
大方はさう感ぜられる。實に人生大切なる
事である。子孫の繁昌を願はざる者はある
まい。子孫の繁昌ご云つても只子供が多く
あるご云ふばかりではなく、精神的、人格的、經
濟的繁昌を云ふのである。以上お話し申し
た人類ごしての人、國民ごしての人、子孫ごし
ての人即ち人類相傳、國民相傳、子孫相傳の此

の三大重任は、天から命ぜられたる女の大役であつて、此心の決心がなければ、育てる親も育てらるゝ子もよいものにはならぬ。そこで男子に於ても女子に於ても、大に舊來の心得を改めねばならぬ。封建時代女の腹は借物なごご云ひ、女も亦貸せものと思ふて居つた者もあつたやうであるが、借物でもなければ貸せ物でもない。金光教祖は御理解

されて「腹は借物」云ふが、借物ではない。萬代の寶ちや。懷妊の時は神の氏子が我が胎内に居ると思つて大切になせよ。ご判然教へられた。大神訓大理解をなされたのである。決して腹は借り物でも貸せ物でもない。萬代の寶ちや。神の氏子が宿つて居るこの女の自覺が肝要である。又の御理解に「女は世界の田地である。世界の田地を肥して

おかねば貴いものが出来ぬ云々」 二二二
ごも教へ
られてある。これは比喩の教であるが、世界
の田地は萬物が土より出づるが如く、子孫
は女の腹田から出る故に、其の腹田を肥して
おかねばならぬ。即ち女の人格を立派にせ
ねばならぬこの御事である。先づ以て女の
心情體格をよくして置かねば、人類も國民も
子孫も立派なものとは出来ぬ。腹を田と云ふ

は不思議な様であるが、下腹の事を氣海丹田
と云ふ。女の心身中に神徳人徳を一ばい詰
めこんでおくのである。さうすると尊い女
から尊い子が出来るのである。土質の悪い
田地には何を植ゑても好い物が出来ない。
よい實も稔らない。其の道理と同じく女の
腹の中の善惡によつて生れる子供の善惡が
分れるのである。又心得ねばならぬことは

如何に良田であつても、悪い種を蒔いてはよい物は出来ぬ。然すれば、男の心情愈々大切である。即ち両性歸一、一心同體共に身を正し、心を眞實にしておかねばならぬのである。今お話ししたのは道理の上の事であるが、實際問題としては、人の子が大きくなるのは、七分も八分も母の力によるのである。固より父の力によることは云ふまでもないが、事實手

をにかけて育てるのは母で、少なくとも生後十二三歳小学校を卒へるまでは母の力によつて大きくなるのである。母たる者はその責任且つ資格の容易ならざる事を思はねばならぬ。次は子孫の教師と云ふ事についてお話しする。

八 子孫の教師

子孫の教師とは現代云ふ所の家庭教育に従

事する者の事である。家庭の訓育役の事である。此の家庭教育の教師になる者は、序言にも云へる如く文部大臣や地方長官の命によつてではなく、天命天職によるのである。其の天命天職を務むる者は何人なるか。此の主任教師の資格を有する者は云ふまでもなく母である。古歌に
なき聲のよきも悪しきも親に似る

教によるぞ藪のうぐひす

こいふのがある。「教によるぞ」こいふ子孫教育の主任教師たる責任は先づ母の妊娠の時に起り、此の妊娠を學問上の言葉では受胎と云ふが、余はこれを受神と云ひたい。受神とは神の靈を女の體に享けること云ふ意である。心理學者の云ふことは心理學者に委す。只余の信仰から受胎よりは今一層尊嚴に受

神云ひたいのである。この受神の時、父も母も心が清くなく、身體が強くなかつたならば、其の子孫一世一代の幸不幸が其所から別れて来る事を知らねばならぬ。一旦受神した時は父よりは母の方が大事である。一層清く強くあらねばならぬ。天職者たる當の責任者であるからである。父母が全身悪質の病氣であつた者の子は亦悪毒を受けて生

れる。啻に病質のみではない。余が経験によるに妊娠中に家族の者に隠れて陰食をするやうな母の子供は大方根性が悪い。母の心が曲つて居れば子供も曲つてくる。云ふのが一般の結論となるのである。茲に於て親の愼みと云ふ事が大切である。親が酒癖があつても、其の親が酒癖を自覺後悔して居る時に出来た子供は其の癖を享け

て居らない。又親が神経者であつても、其の
神経の極めて冷靜な時に生れた子は神経質
の親の遺傳を享けて居らない。親は悪人と
云はれるやうな者であつても、其の親が自分
は悪い癖があるに自覺し後悔して、精神清ら
かになりたる時に妊娠した子供は悪くない。
専門學者は此を如何に論ずるかは知らぬが、余
の實驗である。これは改るに云ふ事が大切

なる所以である。此の「改まり」に就いて更に
いふ事がある。人間は感情の動物とさへ云
はれて居るが、女子の感情に強いのは誰も知
る所である。此の感情に依つて子孫を育て
る事が出来るのであるが、其の感情に強きと
共に女子は迷信に陥入り易い。星廻ちや
相性ちやご九星の迷信は殊に女子に多いの
である。例は結婚の後病氣にでも罹れば

相性はよく見たが擧式の月日が悪るかつた
爲ちやなご直ぐ迷信を起す。子供の肥立生
ひ立が悪るければ妊娠の月が悪るかつたか
らなご云つて罪のない子供に相性や星廻
の迷信を傳へるので、此の迷信に擲れて居る
母に育てられる其の子も亦迷信に捉はれる
から、此れを教祖生神は憐れと思し召されて、
「家柄人筋を改めるより互に人情柄を改めよ」

「縁談に相性を改め見合より互に信の心を
見合よ」と最と懇に教へられてある。世の
大方は家柄や人筋や相性はかりを見て人
柄人格を改めず、實意親切の人かごうかご云
ふ事に重きを置かぬから、相性はよくても夫
婦中は悪く、家柄はよくても貧乏したり、人筋
はよくても相手が道樂者で不人情者であつ
たら目出度い事はあるまい。人筋もよし、家

柄もよし、財産もあり、人格も高し、男振もよしと云ふやうに、三拍子五拍子揃ふた者同志の縁組は、理想として望めるが、人生實際には先づ得難い事は勿論の事である。けれども相性相尅の事は全くの迷信である。此の迷信を取拂はねば眞に家繁昌子孫繁昌は得られないから、此の迷信の繩張を切り拂ふ事が教祖生神の一大心願でありました。實に

生れ年の星廻、丙午や未女の迷信を親が持つて居て、其の子孫に其の迷信を傳へるやうな事は、子孫に對して罪惡である事を思はねばならぬ。丙午の女未女の迷信の事は別の講題で幾度もその根本から説き破つて置いたから茲には多くを云はぬが、最近の一つをいへば、或市の高等女學校を卒業して後廿一才となり、(大正十五年)縁談に煩悶して、母校

の校長に「丙午の年は六十一年目にしかない
ものを私の親は好い悪戯をして斯く子を苦
しめる」と泣き／＼語つた事があつたか傳
へ聞いた。此の丙午未女の迷信は女子より
は男子の方に強い。男子目覺めよ。本教内
に於て如何に多くの男子が丙午の女未女と
結婚して幸福に生活して居るかを見よ。此
の迷信は實に良縁を破り吉方を塞ぎ子孫の

發達を妨げるものである。子孫の教師たる
母親は先づ此の迷信を取拂ひ天地の道理に
叶ふた信心と訓育とをせねばならぬ。家柄
人筋相性相尅を見るより神の氏子が神の氏
子と結婚する心をもち此の心を以て萬事を
扱ひ行くならば家も治まり立派に子孫も榮
ゆるのである。

九 女の一念

昔から「女の一念岩をも透す」と云ふ諺があるが、此は女の思ふ一念透さねば止まぬ強い精神力を云ふたのである。此の尊い精神力が大方は戀などの怨ばらしに使はれて居るが、此の力を信心と子孫の教養に使ふて貰ひたい。誰も自分の子孫が悪かれと思ふ者はない。我が家貧しかれと思ふものもない。誰

も我子孫賢くあれ、我家繁昌するやうに願ふ。女の一念の使ひ所は此處である。岩をも透す強い偉い力を子孫教養の上に注いで、神と皇上との二大恩に報じ奉るご云ふ子孫を育て上ぐる方に用ひてもらひたい。子だから親だから大きくするご云ふ平凡な小さな考ではなく、大目的大心願を立ててもらひたい。併じかくいへばさて、千人萬人に勝れた

一三〇
る大學者大徳者となるべく皆育てあげよと
謂ふのではない。千人に一人萬人に一人と云
ふやうな人も大切であるが、夫れよりは所謂
十人並の時代に役立つ常識ある人格者の多
きを希ふのである。教祖は『三代信心致さば
家柄人筋となる』又『如何なる者にもおかけ
をやる』と諭されてある。三代と云へば永い
やうだが、現在が一代子で二代孫で三代、此の

三代の間一念が續いたら子孫も立派になる
ぞ、俗家も神の家となり神と共に働けること
になる。此の精神的財産を造つて、子孫に
與ふるに云ふ目出度い尊い大目的を立て、
進んでもらひたい。此の人生の基礎信念は
一に係つて女の一念岩をも透すといふ母の
覺悟にあることを悟り、その強い力をその信
念と徳とに向けて貫ひたい。

十 結 び

以上申し述べて来たが、之を要するに、序言にも申したる如く、今日の若い女子は或は教育の進むに随ひて煩悶を生じ、或は星廻や生れ年の吉凶に捕はれて自殺をする者さへ多くある事は時々新聞紙上にてお互に見る所である。實に迷信ほご恐しいものはない。眞に人生の發達を希ふ者は、我教祖生神の教

の光りによりて迷信の苦から醒めよ。又これは迷信ではない、女徳の問題であるが、都會の地に出て見るに、吾こそ現代の教育を受けた新しい女であるぞと謂はんばかりの態度で、眞面目の女子らしさは何處にあるかと思はしむる者を多く見受ける。かゝる徒は自ら日本女徳を汚し社會上にも傷けて居るのである。新聞雜誌にも女子の徳を傷け

二三四
るやうな記事が多く見える。若い女の心を
掻き亂さんとして居るのは、又一面の社會相
である。せめては本教の信者たる婦人方だ
けでも、日本の女らしい美しい心の美人たら
しめたい事である。如何に世が開けても教
育が進歩しても、女子は女子、婦人は矢張婦人
らしくあることが其の天分である。
加賀の千代の句に「一抱あれさ柳は柳かな」と

云ふのがある。ごこまでも女性に女性、男性
は男性でありたい。それを女性が男性氣取
をし、男性が女性氣取をするに至つてはお
話にならぬ。男女各々天分天職がある事を
忘れてはならぬ。精神的に男女一心同體こ
なりて始めて人ご云ふのである。一千有餘
年間陰陽道の九星日柄方角のために苦しめ
られて、男女の不幸を來した事は中々のこと

一三六
であつたが其の迷信の繩張を教祖生神は取
拂れてあるから教の通りを守りて家繁昌子
孫繁昌を願ひ産前産後を安心して親神の氏
子ごして神に継れよ。「尊き神徳に生されて
あるぞ」と教へられてある。生れて來る始が
分り現在生きて居る事さへ判れば死ぬる事
は心配はいらぬ。現在を忘れて先の世ばかり
願ふのは人生の順序を忘れて居る。人の

母たる御婦人方は教祖生神の教へられた眞
の道を知りて天地の道理を悟り日本女徳を
發揚し尊い母ご立ちて子孫を守られたい。
終りに臨みて猶一言申したいのは人の母た
る大役を全うするご否ごは女の大役である
ご共に又人の父たる男子の一大責任である
事である。之については何等の説明も要せ
ざる事である。お互に自覺自重して眞實に

一三七

人生の發達を祈りて止ざる次第であります。

一三八

終り

昭和三年四月一日印刷
昭和三年四月五日發行

神徳書院
藏版

著者 佐藤 範 雄

岡山縣金光町大字大谷三百二十五番地

發行者 佐藤 一 夫

岡山市富田町四十七番地

印刷者 内田 鶴 松

岡山市西中山下百五十四番地

印刷所 山陽新報社印刷部

岡山縣金光町大字大谷三百二十五番地

發行所

金光教徒新聞社

電話金光三七番
振替口座大阪八九八〇番

312
407

終

